

該当箇所	正	誤
p.5 表 1.2.2 最小湿度ガイダンスの対象領域	気象官署	アメダス地点
p.29 (3) 検証結果 (c) 強風、弱風予報の検証	1 月の北風事例で RSM より改善が見られた旨の記述がありましたが、図の取り違えで実際には特に改善は見られていませんでした。 1 月の南西諸島で弱風バイアスが大きい旨の記述がありました、こちらのほうが RSM と比較して改善が見られる事例でした。	また、2006 年 1 月について、北風（北東～北西）の事例のみを抜き出して同様の検証を行ったところ、風速の RMSE や風向の誤差は RSM より小さく、改善が見られていた。一方で風速の ME は 20kmGSM では RSM よりやや弱風バイアスが大きかった（図略）。また、2006 年 1 月について領域毎に見ると 20kmGSM では南西諸島周辺の領域での弱風バイアスが大きくなっていた（図略）。
p.49 表 3.2.1 台風モデルの空間解像度	水平約 24km 鉛直 25 層	水平約 24km 鉛直 40 層
p.6 表 1.2.3 MSM33 時間化後の TAF ガイダンス	予報要素に「発雷確率」を追加	
p.23 脚注 3 (2)地上風速予報の統計的検証	$U_{10} = U \cdot [\ln\{10-d\}/(Z_{0s})] / \ln\{H-d\}/(Z_{0s})]$	$U_{10} = U \cdot [\ln\{10/(Z_{0s} - d)\} / \ln\{H/(Z_{0s} - d)\}]$
p.92 参考文献 藤田司, 2004: メソ数値予報と応用プロダクト	平成 16 年度数値予報研修テキスト, 気象庁予報部, 38-43.	平成 16 年度数値予報研修テキスト 数値予報課報告・別冊第 41 号 合併号, 気象庁予報部, 112-145.
p.93 付録 A	付録 A 統計検証で利用される代表的な指標 本書で利用されている統計的検証の手法について、説明する。	付録 A 統計検証で利用される代表的な指標

p.94 A4.3 空振り率	最小値0に近いほど空振りが少ないことを示す。また、分母を $FO+FX$ の代わりに $N$ として定義する場合もある。	最小値0に近いほど空振りが少ないことを示す。
p.94 A4.4 見逃し率	最小値0に近いほど見逃しが少ないことを示す。また、分母を $FO+XO$ の代わりに $N$ として定義する場合もある。	最小値0に近いほど見逃しが少ないことを示す。
p.94 A4.10 エクイタブルスレットスコア	$S_f$ は「現象あり」をランダムに $FO+FX$ 回予報した場合（ランダム予報）の「現象あり」の適中頻度数である。	$S_f$ は現象の「あり」、「なし」をランダムに $FO+FX$ 回予報した場合（ランダム予報）の「現象あり」の適中頻度数である。